

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

西欧中世初期における病と治癒

氏 名

アシコル 玉美

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文はこれまでの医学史研究では軽んじられることの多かった西欧の中世初期を中心として、医学知識や医術のみならず病因の理解、病者の扱い、医師の社会的地位、教育といった医療全般を見渡して当時の状況を明らかにすることを目的としている。ここでいう西欧とは、かつてカロリング期フランク王国の勢力下にあった地域、すなわち現在のドイツ、フランス、ベネルクス、スイス、並びにイタリアとスペインの一部を指す。また、西ローマ帝国が支配していたアフリカやビザンツ帝国に関する史料も、フランク王国の状況を知るための手がかりとして参照している。イングランド、スコットランド及びアイルランドは本研究では史料の都合上対象外とする。

近年まで中世医学史は医学に関する著作を主たる史料とし、医学知識の水準、教育、瀉血などの処置、薬草の使用といった医術を中心として進められてきた。イタリア半島やイベリア半島におけるアラビア語からラテン語への翻訳によって東方の科学技術がもたらされ、大学が興り、ヨーロッパにおける高等教育の様相が大きく変化した中世の半ばは、医学史においても大きな転換点のひとつであるとされている。西ローマ帝国の崩壊後ギリシアの医学説が西欧に広く知られるようになったのは、イスラームとの接触の機会の多かったイベリア半島及びイタリア半島とその周辺を除けば、11世紀よりも後の時代であるというのが医学史研究者の間では通説であった。中世初期は依然として暗黒の時代とみなされており、この時代の文化的な功績は古典古代の知識をかりうじて後代に伝えたにすぎないという偏見も残っていた。

中世の医療行為について知ろうとするのであれば、従来のような医学書の写本を用いた研究では限られた情報しか得られない。写本研究はそれ自体では中世初期にギリシア医学がどの程度知られていたかという問題を写本の所在から推測することを可能にするのみであり、当時の人々がどのように病を治療していたのかという実態を明らかにするものではない。歴史叙述や法などにも病と治療に関する記述がみられるものがあることが知られている。したがって本論文では、中世初期の人々が病に罹った際

に誰に頼り、何を用いて治療をしたのかを論じるべく、医学書、歴史叙述、聖人伝、書簡、典礼書、法、証書等の病や医師、医術が登場する様々なテキストを用いた。

本論文における論点は、中世初期において何が治療の対象であったのか、誰が治療をしたのか、そしてどのような方法で治療をしたのか、の3点である。これらの問題を論じるには、まず当時の人々の病因の理解について述べなければならない。中世初期の西欧はキリスト教がゲルマン諸部族にも広まり、民衆にいかに信仰をもたせ信徒として相応しい生活を送らせるかということが重要な課題となる時代であった。古代ギリシアに起源をもつ四体液説が医学の基本原則であり、身体の様々な不調は体液のバランスの乱れが原因であるとされた。しかしキリスト教によって病因の理解はその教義に合致したものへと変化を遂げた。神の懲罰や罪のしるし、悪魔の所業として理解された病の治療は、宗教的救済と強く結び付けられたのである。病因の認識の変化はすなわち治療方法の変化を意味する。悪魔祓いや祈祷などが病の治療を目的として行われた。

次に治療者である。ローマ帝国の時代においては医師の多くがギリシア人であったが、古代ギリシアの医学はローマ帝国の遷都や東西分裂、そして西ローマ帝国の崩壊に伴いギリシア人医師は西欧から去っていった。ビザンツ帝国の影響下にあったイタリア半島ではその伝統が続いていたが、アルプス以北の地域ではギリシア医学に触れる機会が失われていった。キリスト教がゲルマン諸部族にも広まってくると、神あるいはキリストが医師として人々の病を癒したという原始キリスト教時代がみられる「天上の医師」ないしは「医師キリスト」の概念もまたヨーロッパ各地に浸透していった。その概念は聖人にまで及び、治癒の奇跡を起こす聖人はとくに人々の崇敬を集めた。上述のように病への認識が変わったこともあり、西欧におけるギリシア医学の衰退の原因がキリスト教であるとする論調をしばしば見かけるが、それは適切な理解ではない。なぜならギリシア医学が完全に消失したわけではなかったからである。わずかに残ったその知識を保持し医師として病者のために働いた人々の多くは、カロリング期以降は主に聖職者あるいは修道士であった。聖人伝などのテキストでしばしば世俗の医術や医師を批判するような描写があるのは、聖人の治癒の奇跡をより強調するためのレトリックであって医術あるいは医師への批判ではない。セビリヤ司教インドルスやフルダ修道院付属学校の長であったラバヌス・マウルスは、医術は拒むべき技ではないと書き残している。カール大帝は教会における医学教育を推奨した。

最後に当時の治療法である。キリストや聖人による悪魔祓いや奇跡の治療も様々なテキストで伝えられている他、生身の人間である医師が施した治療としては、外科的な処置と薬草を用いた治療、病の治療を祈願して油を塗る儀式である「病者の塗油」が挙げられる。修道院は病者の世話をするための施設をもち、薬草園で薬用植物を栽培し、世俗の医術に関する書物を所有し、修道士たちが薬草治療の処方集『ロルシュ

の薬方書』を著した。手稿本 1 点のみが残存しているため、その治療法が広く受容され実践されたという証拠はない。しかし古代ギリシアの医学説にも言及していること、具体的な適応症と処方内容、調製法、用法用量まで詳細に記載していることから、当時の医学知識を測る上での重要な史料であると言える。同書の序ともいえる「医学への弁明」を見る限りでは、キリスト教徒からみた異教徒である古代ギリシアの人々が生み出した知恵と知識に頼ることに對し罪悪感や嫌悪感を抱く人が当時から存在していたと考えられる。とはいえキリスト教社会は古代ギリシアの医学及び医術を受け入れ、11 世紀頃よりアラビアを経由してその知識が再流入するまでの間もその伝統をつないでいた。ギリシア医学の衰退はキリスト教による拒否が理由ではなく、ギリシア語の知識がなかったことがその要因であった。

キリスト教は病の治癒に「救済」という新たな概念を付加した。神の懲罰や悪魔憑きである病が癒えるということは、罪の赦しと悪魔からの解放を意味する。治癒がすなわち「救済」と同義であった中世のキリスト教世界では聖職者は「魂の医師」として、罪という魂の傷を負った人々のケアにあたる使命を背負っていた。魂の傷を癒すための手段は告解と改悛であった。病の治療のために行われていた「病者の塗油」は 8 世紀頃より次第に「終油の秘蹟」という典礼へと変化し始める。死にゆく病者に赦しをあたえる塗油は、遅くとも 12 世紀には死の瞬間に赦しという「救済」を得る手段であり、すべてのキリスト教徒が最後の審判に備えて受けておくべき秘蹟として理解されていた。10 世紀頃まではまだ塗油は瀕死の病者のみならずすべての病める人が治癒のために受ける儀式であった。その意義が変化の兆しをみせる 8 世紀はまさに告解と改悛が重要視され、聖職者に「魂の医師」の役割が求められるようになった時期である。教会史研究において塗油の意義の変遷は、カロリング期に告解と改悛の必要性が説かれたこと、そして典礼のあり方が変化したことと関連付けられている。キリスト教による病因の理解の変化とそれに伴う治癒がもつ意味の変化の延長線上に、「魂の医師」の概念の普及と告解及び悔悛の意義の増大といった、中世初期の教会での様々な変化の延長線上に後世における死に対する儀式的あり方が見えてくる。時代とともに塗油の意義や実施方法が異なるものになったとしても、それが魂を癒す「救済」であるということには変わりはないのである。

本論文は宗教的な意味合いの強い治療行為と古代ギリシア由来の世俗の医術の双方をまとめて論じている。中世西欧においては身体 の病と霊的な問題が明確に区別されず、その境界がはっきりとしないためである。従来の医学史研究は世俗の医術をテーマとし、霊的な問題への対処は神学や教会史において議論されてきた。キリスト教がすべての中心にあった西欧中世の文化的あるいは社会的状況を考察するにあたり、このように分野を明確に分けることは適切ではない。本研究は医学史研究の立場に基づく論考ではあるが、そこに神学及び教会史研究の成果を取り入れる試みでもある。